

平成29年7月26日(水)

老球の細道345号

## 何気ない運命の一言

会津バスケットボール協会 室井 富仁

テレビのBS朝日で毎週『昭和偉人伝』を楽しみに見ている。昭和生まれの私にはなじみのある、その道のスーパースター達の色々なエピソードが放映される。昭和の偉人の波瀾万丈の生き方を私自身の人生と比較させながら色々勉強させてもらっている。

ちょっと前に今は亡き作詞家・阿久悠の特集があった。生涯5,000曲以上も作詞をし、日本レコード大賞曲を5曲も作った。1971年「また逢う日まで」尾崎紀世彦。1976年「北の宿から」都はるみ。1977年「勝手にしやがれ」沢田研二。1978年「UFO」ピンク・レディー。1980年「雨の慕情」八代亜紀。前人未到の大記録である。

もっとすごいのは、歌詞だけに止まらず小説の世界でも実績を残していることである。有名なのは直木賞候補に挙がった『瀬戸内野球少年団』。あの伝説の女優夏目雅子が主演して映画化もされている。膨大な数の作詞と幾多の小説をこなすには、どれほどのアイデアが頭に詰まっているのか恐るべし。そのアイデアの源泉を探ってみたいものである。

絶頂期の中、残念ながら尿管がんに侵され70歳の若さで2007年に亡くなった。亡くなる前の1999年に音楽文化に貢献したと紫綬褒章を受賞している。この時の阿久悠の受賞スピーチを長男がインタビューで話していた。私の脳裏に強く残った。

それによると、阿久悠の今があるのは三人の人の何気ない言葉だという。一人は、小学5年生の時の担任の先生、「君の作文は作風が横光利一に似ている」と褒められたこと。二人目は奥様の言葉で、売れない時代に「あなたなら大丈夫」と励まされたこと。三人目は警察官だった父親で、息子の作った歌など聴いていないと思っていたら「お前の歌は品がいい」と褒められたこと。特に小学校の頃に自分の作文を小説家に例えて褒められたことは死ぬまで忘れなかつたらしい。なぜなら阿久悠は本来は作家を目指していた。四国淡路島の洲本高校在学中に野球部が甲子園全国大会で優勝し日本一になった。そのことが阿久悠に、田舎の人間でも全国レベルで活躍できる人間になれると自信を持たせたという。そして小説家を目指して明治大学文学部に入学した。スポーツの存在も少年に大志を抱かせるきっかけになる。

バスケットボールにおいても育成年代における指導者の言葉かけは非常に重要である。子どもたちに何気なくかけている言葉が、子供たちの一生を左右することがある。逆に、やる気を阻害し可能性の芽を摘むこともある。

今になって卒業生と話をすると、あの時先生からこう言われた、ああ言われたと言われることがある。当の私はほとんど覚えていない。たまたま話をしている卒業生は悪いことは言わないが、総じて思い出すと、私は相手を傷つける言葉を相当言っていた。言葉は言った方は忘れてしまうが、言われた方は絶対忘れない。放たれた矢と言葉は戻ってこない。

多くの偉人達は色々な人たちに出会い、運命の一言を受けている。その運命の一言を発する代表的な人間はだいたい3人。親、伴侶(恋人)、そして先生または指導者である。

私たち指導者の任にある者は、子供たちに声かけする時は心してかけなければならない。褒め言葉を、プラス思考で、そして具体的に、例えを用いて、毎日のように運命の一言光線を浴びせたいものである。